

明治期における 「お～だ」「お～です」の使用

—— 表す時間的側面からの考察 ——

山 田 里 奈

1. はじめに

近世後期江戸語で用いられた尊敬表現形式の一つに、「お（ご）＋動詞連用形＋だ」がある（以下、「お～だ」と記し、「ご～だ」も含む）。この形式は、第三者を待遇する場合に使われる形式として洒落本から見られ、約 100 年を経て、聞き手を待遇する場合に使われる形式として滑稽本や人情本で多用されるようになる（小松寿雄（2005））。そして、現代日本語では、「お（ご）＋動詞連用形＋です」（以下、「お～です」と記し、「ご～です」も含む）の形で、次の例 1 のように用いられている。

（例 1）何をお探しですか。（菊地康人（1994・1997））

この「お～だ」から「お～です」への変化は、小松寿雄（2005、2006）に詳しい。小松氏は、①「お～だ」は明治期以降に衰退するという見方もあるが、連用形の一つ「お～だっ（た）」が明治期以降に一般化することから、必ずしも衰退したとは言えない、②「お～だっ（た）」の一般化の理由は過去や完了の明記のためとはいえない、③「お～だ」から「お～です」への交代は「聞き手への配慮の増大が影響していると思われる。デスの普及に伴う文末総丁寧化の動き（小松（2006）P.102）」による、ということを指摘している。本稿はこのうち、①②について考察を行なうものである。

まず、①に関してである。明治 20 年前後あたりの小説を調査すると、「お～だ」の使用は使用者の偏りと場面の偏りを見せるようになるため（辻村（1968）、

山田 (2014) 等)、「お～だ」の使用自体が盛んではなくなるという点是否めないが、新しく用いられるようになる「お～だっ (た)」がどのように用いられたかを明らかにする必要がある。次に、②の「お～だっ (た)」の出現が過去や完了の明記ではないという点である。このためには「お～だ」や「お～です」の用例をすべて扱い、比較する必要があるだろう。

したがって、本稿の目的は、明治初年から明治 20 年代 (以下、「明治期」) における「お～だ」の使用の比較と、当期に起こった「お～だ」と「お～です」の交代現象について、待遇面以外の側面として、表す時間的側面に注目して考察を行なうことである。

2. 「お～だ」について

近世後期江戸語から明治期東京語における「お～だ」「お～です」について明らかになっていること (2.1)、現代日本語における「お～だ」の使用について指摘されていることのうち、本稿と関わりのあること (2.2) について見ていく。

2.1 近世後期江戸語から明治期東京語における「お～だ」「お～です」

「お～だ」が使われ始めた近世後期江戸語から明治期東京語におけるその使用状況は、湯沢幸吉郎 (1954・1957)、辻村 (1968)、小松 (2005、2006)、山田 (2014) 等において言及されている。近世後期江戸語における「お～だ」は、活用形によっては高い敬意を表すこともあるが、主として〈対等〉の関係、かつ、親しい間柄で用いられ、女性の使用や男女間での使用が多く見られる。明治期になると、主として〈対等〉の関係で用いられるという点は大きく変わらないが、家庭内での会話や主人公の母親世代の女性の使用に偏るようになる (山田 (2014))。一方、明治期以降に一般化する「お～です」の使用者は、書生や教養層であり、〈対等〉の関係以上の聞き手に対して用いられる。つまり、前述したように、「お～だ」から「お～です」への交代は、「お～だ」よりも表す敬意が高い形式として、「お～です」が用いられるようになるという交代であった (小松 (2006))。

「お～だ」が明治期に衰退したとは言えない理由として、小松 (2005) では、連用形「オ～ダッ」の一般化を挙げている。これについては、「オ～ダッが使われた、その表現だけをみれば、過去 (テンス)、あるいは完了 (アスペクト) を明記した表現といえる。しかし、オ～ダッが使われだした理由を過去や完了の明記だとすると、その後もオ～ダで過去や完了を表していることの説明がつか

かない。(P.94)」と述べている。この「お〜だ」と「お〜だっ(た)」の併用時期があったのはなぜかという点については、ほぼ同時期に起こった「お〜です」「お〜でした」の一般化と合わせて見ていく必要があるのではないかと考えられる。

2.2 現代日本語の「お〜です」と近世後期江戸語の「お〜だ」との対照

現代日本語における「お〜だ」の意味・機能を明らかにした研究には、山田敏弘(1990)、窪田富男(1993)、菊地(1994・1997)、丹羽哲也(2008)、新屋映子(2010)等がある。菊地(1994・1997)や丹羽(2008)では、「お〜だ」を「……する」で言い換えられる、「……した」で言い換えられる、「……している」で言い換えられる、「……していた」で言い換えられると分けながら説明している。

丹羽(2008)と近世後期江戸語における「お〜だ」を対照させると、テイル形、テイタ形に言い換えられる近世後期江戸語の「お〜だ」は、現在の状態と動き+効力、未来の完了や未来の状態で重なり(山田(2023))、「オ V ダッタ形」は、近世後期江戸語では過去の動きの継続で使用が見られるが、過去の結果継続の例は見られないという点が現代日本語と異なっている(山田(2023))。

したがって、本稿の対象とする明治期東京語における「お〜だ」の使用を明らかにすれば、近世後期江戸語から現代日本語における「お〜だ」の表す時間的側面の変化の様相を知る手がかりを示すことができると考えられる。

2.3 問題の所在と本稿の目的

以上、「お〜だ」「お〜です」の先行研究について見てきた。本稿では、明治期東京語における「お〜だ」「お〜です」の表す時間的側面に着目し、「お〜だ」と「お〜です」との交替における待遇の面以外からの両形式の違いを明らかにすることを目的とする。具体的には次の2点について述べる。

(1) 明治期における「お〜だ」「お〜です」の表す時間的側面

(2) 過去の結果継続での使用から考える「お〜だ」から「お〜です」への変遷

以下、第3節では調査対象資料と考察方法について、第4節では明治期東京語における「お〜だ」の使用状況、それを踏まえた「お〜です」との比較を行ない、第5節でまとめる。

3. 調査対象資料・考察方法

(1) 調査対象資料 明治初年から明治20年代における小説の会話文を調査対

象とした。各資料の詳細は最後の頁にまとめた通りである。

(2) 考察方法 以下の二点を基準に用例収集、用例分類、考察を行なった。

①考察対象について

- ・ 明治期東京語の資料において、「お～だ」の用例を収集した。小松（2005）を参考に、活用形のうち、未然形「お～なら」、連体形「お～な」「お～の」、已然形「お～なれ」は対象外とした（4.1）。
- ・ 聞き手話題尊敬と第三者話題尊敬で「お～だ」が使用された用例を収集した¹。
- ・ 補助動詞「ている」「てくれる」「てあげる」等の「ておいでだ」「ておくれだ」「ておあげだ」は別に扱って考察を行なう必要があると考えられるため、今回の調査の対象から外した。

②言い換えによる「お～だ」の表す意味についての考察

菊地（1994・1997）や丹羽（2008）、村上謙（2009）を参考に、「……する」で言い換えられる、「……した」で言い換えられる、「……している」で言い換えられる、「……していた」で言い換えられる、という四つに分類し、どのような時間的側面を表しているのかを考察した。

4. 明治期における「お～だ」「お～です」の使用

以下、明治期における「お～だ」について考察した後、「お～です」と比較する。

4.1 明治期における「お～だ」と「お～です」の概観と考察対象

明治期における「お～だ」と「お～です」の使用を調査し、まとめた表が【表1】である。小松（2005）の指摘の一つである①「お～だ」は連用形「お～だっ（た）」が明治期に一般化することから、必ずしも衰退したとは言えないという点について考えるために、山田（2023）の近世後期江戸語の調査結果も掲載している。なお、本稿では主として文末で用いられた例と「お～だ」の形が現れている例を考察の対象とするため、表中の網掛け箇所が考察対象となる。また、表中の（ ）で示した数値は、漢語サ変動詞での使用と「存ず」での使用を合わせた用例数の内訳を示している。

¹ 謙譲の意を表す「お～だ」は洒落本に見られるという指摘があるが、その後、尊敬表現形式として用いられるようになる（小松（2005））。本稿では尊敬表現形式として用いられた用例のみを対象とする。

【表 1】明治期における「お～だ」とその周辺の表現形式

表現形式	活用形による下位分類 ／資料の刊行年代	a：近世後期江戸語 (山田 (2024))		明治初年～10 年代		明治 20 年代		b：総計		a と b の 比較
お～だ	お～だろ (う)	10 (1)	4.4%	3 (0)	1.9%	6 (3)	3.6%	9 (3)	2.8%	↘
	お～なら			10 (1)	6.4%	9 (5)	5.4%	19 (6)	5.9%	↗
	お～か	50 (5)	22.2%	10 (1)	6.4%	18 (3)	10.7%	28 (4)	8.6%	↘
	お～だっ (た)	5 (2)	2.2%	3 (1)	1.9%	6 (0)	3.6%	9 (1)	2.8%	↗
	お～でない (禁止)	25 (0)	11.1%	9 (2)	5.8%	11 (0)	6.5%	20 (2)	6.2%	↘
	お～でない (否定)	15 (1)	6.7%	3 (1)	1.9%	7 (1)	4.2%	10 (2)	3.1%	↘
	お～で	4 (0)	1.8%	27 (8)	17.3%	26 (14)	15.5%	53 (22)	16.4%	↗
	お～だ	102 (5)	45.3%	29 (18)	18.6%	40 (9)	23.8%	69 (27)	21.3%	↘
	お～な					4 (0)	2.4%	4 (0)	1.2%	↗
	お～の	14 (1)	6.2%	62 (18)	39.7%	40 (21)	23.8%	102 (39)	31.5%	↗
	お～なれ					1 (1)	0.6%	1 (1)	0.3%	↗
	小計	225 (15)	100.0%	156 (50)	100.0%	168 (57)	100.0%	324 (107)	100.0%	
お～です	お～でしょ (う)					2 (1)	6.7%	2 (1)	4.3%	
	お～でし (た)			1 (0)	5.9%			1 (0)	2.1%	
	お～です			16 (4)	94.1%	28 (16)	93.3%	44 (20)	93.6%	
	小計			17 (4)	100.0%	30 (17)	100.0%	47 (21)	100.0%	
総計		—	—	174 (54)	—	200 (72)	—	372 (128)	—	

【表 1】から、「お～だ」が各活用形において使用されることがわかる。具体的に変化を見ると、未然形「お～だろ (う)」、連用形「お～か」、「お～でない (禁止)」、「お～でない (否定)」、終止形「お～だ」での使用が減少傾向にあることがわかる。特に、「お～か」や「お～でない (禁止)」、「お～だ」は近世後期江戸語において、それぞれが 10% を超えるほど多用されたことから考えると、「明治期以降に衰退した」と見ることができる。しかし一方で、小松 (2005) が述べるように、「お～だっ (た)」は若干の増加傾向が見られ、連用形「お～で」や連体形「お～な」、「お～の」、已然形「お～なれ」等の使用も増加傾向にあることから、活用形によっては衰退したとは言えない。つまり、明治期における「お～だ」は新しい形である「お～だっ (た)」の出現と文中での使用の増加という点において衰退したとは言えないのであり、「お～だっ (た)」以外の文末での使用は衰退傾向にあるといえる。また、「お～です」の使用は明治初年から明治 20 年代にかけて増加する傾向もわかる。

4.2 表す時間的側面からの考察

4.1 で示した【表 1】のうち、「お～だ」の考察対象とした用例について、ル形、タ形、テイル形、テイタ形のいずれに言い換えられるかという点からまとめる

と、次の【表2】のようになる²。表中、「ル形・テイル形」等と併記されているのは、どちらにも解釈可能であったことを示している。

【表2】ル形、タ形、テイル形、テイタ形への言い換え

表現 形式	資料の刊行年代 活用形／言い換え	明治初年～10年代							明治20年代							総計
		ル形	ル・テイル形	タ形	タ・テイル形	テイル形	テイタ形	小計	ル形	ル・テイル形	タ形	タ・テイル形	テイル形	テイタ形	小計	
お～だ	お～だろ（う）	2 (0)			1 (0)			3 (0)	1 (1)	2 (1)			1 (0)	2 (1)	6 (3)	9 (3)
	お～か	2 (0)	4 (0)		1 (0)	3 (1)		10 (1)	8 (1)		5 (0)		2 (0)	3 (2)	18 (3)	28 (4)
	お～だっ（た）			1 (1)	2 (0)			3 (1)			4 (0)	1 (0)			1 (0)	9 (1)
	お～でない（禁止）	3 (2)	2 (0)			4 (0)		9 (2)	4 (0)	4 (0)				3 (0)	11 (0)	20 (2)
	お～でない（否定）	1 (0)				2 (1)		3 (1)	2 (0)		3 (0)			1 (1)	6 (1)	9 (2)
	お～だ	8 (2)	1 (0)	5 (1)	3 (0)	11 (5)	1 (0)	29 (8)	2 (0)	8 (0)	11 (0)	5 (1)	2 (0)	12 (7)	1 (1)	41 (9)
	小計	16 (4)	5 (0)	6 (2)	6 (0)	20 (7)	1 (0)	57 (13)	15 (2)	14 (1)	33 (0)	6 (1)	5 (1)	21 (11)	2 (1)	88 (17)
																145 (29)

【表2】の「小計」から、活用形にばらつきはあるが、終止形「お～だ」はル形、タ形、テイル形、テイタ形のいずれにも言い換え可能であり、「お～だ」が様々な時間的側面を表し得たことがわかる。これは、近世後期江戸語と同様の傾向を示している（湯沢（1954・1957）、山田（2023））。近世後期江戸語から少しずつ用例が見られ始め、本稿で特に注目する「お～だっ（た）」も、近世後期江戸語と同様、タ形やテイタ形に言い換えられる場合に用いられている。以下、表す時間的側面について全体を見ながら、「お～だっ（た）」の特徴について述べる。

4.2.1 未来の動き、未来の状態を表す例

未来の動きや未来の状態を表す例では、「お～だろ（う）」「お～か」「お～でない」「お～だ」の形が見られた。以下の例2は、未来の動きを、例3は未来の状態を表す場合に用いられている。

（例2）何時頃^{かへり}お帰来だ。（中流男性鷺見柳之介→下女鈴⇒中流女性お種）【〈上→下〉⇒〈対等〉】『多情（後編）』307〈明治20〉〈ル形〉³

² （ ）は漢語サ変動詞、または、「存ず」の用例数の内訳を示している。以下、いずれも同様である。

³ 用例は、考察対象に下線を引き、考察の際に注目した表現に点線を付している。用例全体や前後文脈から考察を行なった場合は点線を付していない場合もある。用例の後には、〈話し手→聞き手（⇒第三者）〉【〈話し手と聞き手の上下関係〉⇒〈話し手と第三者の上限関係〉】『資料名』巻・回、頁〈明治初年～明治10年代の資料には「明治10」、明治20年代の使用には「明治20」〉〈言い換え〉という順で用例に関する情報を付している。

- (例3) お^{とつ}爺さんもお^{つか}母さんもお^{わたい}私が今から居なくなつたらお薬を煎じたりお粥を拵へたりお背中を撫たりする者がないのでお困りだらうと思ふと夫が寔に悲しいけれど〈下略〉。(娘お千→両親)【〈対等〉】[『春雨』312]〈明治10〉〈ル形〉

例2は、お種に会うために訪問してきた柳之介が、その家の下女に〈いつ帰るか〉と未来のある時点での動きについて聞く場合に、例3は、〈娘の自分がいなくなったら両親が困るだろう〉と未来のある時点での状態について言う場合に用いられている。

4.2.2 現在の状態を表す例

現在の状態を表す例は、「お～か」「お～だ」の形で見られた。以下の例4、例5は状態動詞の例である。

- (例4) それとも何^{なん}歟御免になつても仕様がないうなわりい事をした覚えがお有りか。(お政→文三)【〈対等〉】[『浮雲』20]〈明治20〉〈ル形〉
- (例5) お前方は何んな嫌疑で茲にお出でかの。些トお話を聞きたいものだ。(少年→監獄の中にいる者たち)【〈下→上〉】[『雪中』131]〈明治10〉〈ル形〉

例4はお政から免職になった文三に対して、〈何か心当たりがあるか〉という場面で、例5は、少年が〈どんな嫌疑でここにいるのか〉と監獄に入った理由を聞いている。どちらも現在の状態を表していると考えられる。

4.2.3 結果継続を表す例

以下の例6、例7は結果継続を表す例である。「お～だろう」「お～か」「お～でない」「お～だ」の形が見られた。

- (例6) お母さんが御存生なればお歳は幾ツにおなりかネ。(継母→お春⇒お春の母)【〈対等〉⇒〈対等〉】[『花間』203]〈明治20〉〈テイル形〉
- (例7) 左様、僕も新聞を読んで驚いたが、君は別して二人に懇意だから、定めて事情をお聞きだらふ。(藤井→松本)【〈対等〉】[『雪中』128]〈明治10〉〈タ形またはテイル形〉

例6は〈今の年齢はいくつになっているか〉と聞く場合に、例7は〈きっと

事情を聞いているだろう」と聞く場合に用いられている。例6は誕生日を経て変化し、その状態が続いている年齢を、例7はどこかの時点で事情を聞いて、今はその事情を知っている状態であることを示している。

4.2.4 現在の動き（現在の動作継続）を表す例、習慣・くり返しを表す例

現在の動きを表す例には、次のような例が見られ、「お～だろ（う）」「お～か」「お～でない」「お～だ」の形であった。

- (例8) お隠しでない、チヤンと知れ切て居ます。お前の了簡でハ、阿父様や妾が邪魔をして彼の方に配はせないとお思ひだらうが、マア能く考へて御覽なさい。(夫人→艶子)【〈対等〉】[『緑蓑』349]〈明治20〉〈テイル形〉

例8は聞き手に気持ちを隠すことをやめるよう言う場合に、〈隠しているな〉という意味で「お隠しでない」を用いたり、聞き手が今考えていることを推測して、〈思っているだろう〉という場合に「お思ひだらう」を用いたりしている。

他に、次の例9のように、習慣・繰り返しの例と考えられる例も見られた。

- (例9) フム学問々々とお言ひだけけれども立身出世すればこそ学問だ。(お政→文三)【〈対等〉】[『浮雲』30]〈明治20〉〈繰り返し〉〈ル形またはテイル形〉

例9は、〈何かと言えば学問と言っている〉と聞き手に対して言う場面で「お言ひだ」が用いられている。〈いつも言っている〉という点から、習慣・繰り返しの例と捉えられる。

4.2.5 現在と繋がりのある過去の動き、状態を表す例

現在と繋がりのある過去の例は、タ形、または、テイタ形に言い換えられる例で見られた。また、「タ形かテイル形」のように、どちらに言い換えられるか判断ができない例も見られた。形は、「お～だろ（う）」「お～か」「お～だつ（た）」「お～でない」「お～だ」で表れている。

- (例10) 昨日の二両は、お前如何お為^しだえ。(お勝→三吉)【〈下→上〉】[『浅瀬』273]〈明治20〉〈タ形〉

- (例 11) お待申た芦の家先生お君さんも能くお出だ。^{いで}(赤井萬治→お君)【〈上→下〉】『巷説』164]〈明治 10〉〈タ形〉
- (例 12) さうともネ、^{いくらおつか}幾程母親さんの機に入ッたからッて肝腎のお前さんの機に入らなきやア不熟の基だ。しかしよくお話しだッた。^{もと}(お政→文三)【〈対等〉】『浮雲』14]〈明治 20〉〈タ形〉
- (例 13) 鷺見さんはもう^{おやすみ}御寝かい。(舅→嫁お種 (⇒鷺見柳之介))【〈対等〉 (⇒〈対等〉)】『多情 (後編)』334]〈明治 20〉〈タ形またはテイル形〉

例 10 は二両という金を過去のある時点において〈どうしたか〉を聞く場面で用いている。発話時においてもその影響が残っているため、現在と繋がりのある過去の例と考えられる。例 11 は入ってきた聞き手に対して〈よく来た〉と出迎える際に用いている。この例も、入ってきて今いることに注目しており、現在と繋がりのある過去と考えることができる。似た例として、例 12 は文三がこの発話の直前に話したことに〈よく話した〉という場面で用いている。直前の事柄に対して用いており、現在と繋がりのある過去といえる。この場合、例 11 と例 12 は似た例であるが、「お～だ」も「お～だっ (た)」も用いることができていると考えられる。例 13 は、話し手が第三者である鷺見という男性がもう寝たかどうかを聞く場面で用いられている。今寝ているかどうかは不明であるため、現在と繋がりのある過去と捉えることができる。

4.2.6 現在とは切り離された過去の動き、状態を表す例

4.2.5 で挙げた現在と繋がりのある過去ではなく、現在とは切り離された過去の動きや状態を表す場合には、「お～だ」と「お～だっ (た)」の使用が見られた。

- (例 14) ナニ越山が来た。何處でお逢だッたネ。(中島博智→妹お今)【〈対等〉】『緑蓑』299]〈明治 20〉〈タ形〉
- (例 15) 何だと云ッて、彼様なをかきな処置振りをお為だ？^し(お政→お勢)【〈対等〉】『浮雲』65]〈明治 20〉〈タ形〉

例 14 は、妹であるお今が、兄の知り合いである越山という人物に会ったということを兄である博智に伝えた後の発話である。お今と越山が会ったのは、現在との繋がりはないと考えられる。例 15 は、娘であるお勢の客人に対する振る舞いに対して、母親であるお政が〈おかしな素振りをしたのか〉と聞く場

面で用いられている。おかしな素振りをしたことは、現在との繋がりはないと考えられる。

4.2.7 まとめ

以上、明治期における「お～だ」についてみてきた。テイタ形に言い換えられるか否かという点において、「お～だっ（た）」が他の活用形と異なっていたため、「お～だっ（た）」とそれ以外の活用形（代表形として「お～だ」と示す）で二分してまとめると、次の【表3】のようになる。全体の用例数が少ないため、用例の多寡にかかわらず、用例が見られた場合に「○」を付している。

【表3】明治期東京語における「お～だ」の時間的側面

言い換え	ル形		タ形		テイル形				テイタ形	
表現形式／意味	未来	現在	現在と切り離された過去	現在と繋がりのある過去	動作継続	結果継続	現在の状態	習慣・繰り返し	過去の動作継続	過去の結果継続
お～だ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
お～だっ（た）			○	○					○	

「お～だ」は、「お～だろ（う）」や「お～か」、「お～でない」という形になった場合でも、近世後期江戸語に引き続き、ル形、タ形、テイル形、テイタ形に言い換え可能である。これは、小松（2006）の指摘—「オ～ダッが使われだした理由を過去や完了の明記だとすると、その後もオ～ダで過去や完了を表していることの説明がつかない。（P.94）」—と一致する結果といえる。「お～だっ（た）」は、タ形であるため、タ形とテイタ形に言い換えられる場合にのみ使用されていた。表す時間的意味としては、現在と繋がりのある過去の例、現在と切り離された過去の例、過去の動作の継続の例が見られた。過去の結果継続の例は見られなかったが、これは、単純に用例が少ないからとも考えられるが、近世後期江戸語の調査においても同じ傾向が見られたため（山田（2024））、現代日本語において用いられる過去の変化の結果継続の用法（丹羽（2008））での使用までは、「お～だっ（た）」がカバーしていなかったとも考えることができる。

4.2.8 「お～です」との比較

「お～です」の活用形についてまとめると、次の【表4】のようになる。用例数は少ないが、「お～です」は明治初年から10年代には17例見られ、明治20年代には31例見られたことから、その使用の増加傾向を知ることができる。

【表 4】「お～です」の活用形

活用形	用例数
お～でしょ（う）	10（8）
お～でし（た）	10（1）
お～です	27（12）
合計	47（21）

【表 4】から、「お～です」は「お～でしょ（う）」に漢語サ変動詞の使用が多く、「お～でし（た）」に漢語サ変動詞の使用が少ないという傾向を見ることができる。「お～です」は「ごぞんじですか」「お帰りますか」のように「か」を伴ってと相手に聞く場合には漢語サ変動詞や「存ず」が多く

出現しており、それ以外の「お～です」は漢語サ変動詞への偏りはない。以下、それぞれどのような時間的側面を表すかという点から用例を挙げる。

（1）未来の動きや状態を表す例

未来の動きや状態を表す例が見られた。次の例 16 は未来の動きを表している。

（例 16）僕は永遠も御厄介になつて居りたいのですが、御迷惑ですか。（鷺見 柳之介→お種）【〈対等〉】『多情（後編）』295〕〈明治 20〉〈ル形〉

例 16 は話し手である鷺見が〈いつも（あなたの）厄介になっていたいが迷惑するか〉と尋ねる場面で用いられている。

（2）現在の状態を表す例・結果継続を表す例

現在の状態を表す例と結果継続を表す例についてである。以下の例 17 は現在の状態を、例 18 は結果継続を表す例である。

（例 17）〔ト独話を云ひながら後を顧みれば、障子の外に人影あり。大声呼んで曰く〕旦那は御出ですか。〔国野は之れを聞いて顔色忽ち土の如し。〕（知らない男→国野）【〈不明〉】『雪中』〕〈明治 10〉〈ル形〉

（例 18）今何處にお住居ですか（女）じき近所でございますヨ。（小町田→芸者）【〈上→下〉】『当世』〕〈明治 10〉〈結果継続〉〈テイル形〉

例 17 は訪問してきた男が〈家に今いるかどうか〉を尋ねている。例 18 は話し手が聞き手に対して、〈今どこに住んでいるか〉を尋ねる場合に用いている。

(3) 現在と繋がりのある過去を表す例

現在と繋がりのある過去を表す例には、「お～です」、「お～ですか」「お～でした」の使用が見られた。

(例 19) 田村さん何処の女とお聞きでしたな。(国野→田村)【〈対等〉】『雪中』147] 〈明治 10〉〈テイル形・タ形〉

(例 20) ヲヤ任那君。おかへりですか。君までが僕を小説視するヨ。(小町田→任那)【〈対等〉】『当世』85] 〈タ形〉

(例 21) 貴女お加減がお悪かつたさうで御ざいますか。ツイ取込で居つたものですから、御見舞にも上りませんで御疎遠を致しました。夫れでもモウ悉皆御快復ですか。(お今→艶子)【〈対等〉】『緑蓑』340] 〈明治 20〉〈タ形・テイル形〉

例 19 はある女性の噂話をしている際に、聞き手に対して〈どこの女と聞いたか、聞いているか〉と言う場合に用いられている。ある過去の時点で聞いて今知っているため、それを聞いていると考え、現在と繋がりのある過去の例といえる。例 20 は帰ってきて部屋に入ってきた任那という男性に対して、〈帰ったか〉と言う場面で用いられている。帰ったという直前の動きに注目し、帰ったことが発話時現在に影響を与えている。例 21 は話し手が聞き手に対して、〈回復したか、回復しているか〉と聞く場合に用いている。回復したという状態が発話時の現在まで続いていると考えられるため、現在と繋がりのある過去といえる。

(4) 現在と切り離された過去を表す例

現在と切り離された過去を表す例は、「お～でした」での使用しか見られなかった。「お～だっ(た)」との違いは、以下の例 22 のように過去の動作継続だけでなく、例 23 のように過去の動きか、過去の結果継続か悩む例が見られたという点である。

(例 22) ぢや貴娘も御待でしたの。(東令嬢→桃井)【〈対等〉】『この』334] 〈明治 20〉〈過去の動作継続〉〈テイタ形〉

(例 23) お勇さんは夫子にも決して素生を明かしてくれるなとクレ／＼御頼みでしたから、夫れゆえ今日までも包み隠して居たので御坐います。(お春→国野(⇒お勇))【〈対等〉(⇒〈対等〉)】『花間』240] 〈明治 20〉〈過

去？過去の結果継続？）〈タ形・テイタ形〉

例 22 は、話し手の東令嬢が過去のある時点で〈待っていた〉という場合に用いられている。

例 23 は、話し手のお春が、第三者にあたるお勇に、素性を誰にも話さないでほしいと頼まれていたと話す場面で「お頼みでした」が使われている。過去のある時点で頼み、発話時点まで頼んだ状態が続いていると考えれば、過去の結果継続と捉えられる。

5. まとめ

以上、明治期東京語における「お～だ」と「お～です」の表す時間的側面について見てきた。【表 3】に、「お～です」「お～でし（た）」の使用状況を追加すると、次の【表 5】のようになる。

5.1 明治期における「お～だ」「お～です」の表す時間的側面

【表 5】から、明治期東京語における「お～だ」は、「お～だっ（た）」以外の活用形においてもばらつきはあるものの、あらゆる時間的側面を表す場合に用いられたことがわかる。これは、小松（2006）が、「お～だっ（た）」の使用が見られるようになったからといって、「お～だ」の表す時間的側面が制限されたり、縮小したりする傾向は見られないと述べる点と一致している。ここで、「お～だっ（た）」「お～です」「お～でし（た）」に注目したい。「お～だっ（た）」は、現在とつながりのある過去でも、つながりのない過去でも使用が見られ、過去の動作継続の使用も見られたが、過去の結果継続の例は見られなかった。これは、近世後期江戸語における傾向と一致しており（山田（2023））大きな変化はしていないと考えられる。次に「お～です」についてである。「お～です」

【表 5】 まとめの表

言い換え	ル形		タ形		テイル形				テイタ形	
	未来	現在	現在と切り離された過去	現在と繋がりのある過去	動作継続	結果継続	現在の状態	習慣・繰り返し	過去の動作継続	過去の結果継続
お～だ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
お～だっ（た）			○	○					○	
お～です	○	○	○	○		○	○	—		
お～でし（た）			○	○					○	△

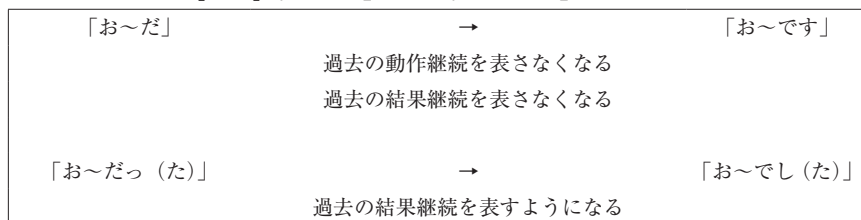
※表中、「—」は用例は見られなかったが、出てきても不思議ではないことを示す。

で注目すべきことは、テイタ形に言い換えられ、過去の動作継続や過去の結果継続を表すと考えられる例が見られなかったことである。これは、「お～だ」があらゆる時間的側面を表し得たことと比較すると、用法が狭くなっていると考えることができる。最後に「お～でした」であるが、過去とつながりのある過去や切り離された過去、過去の動作継続での使用が見られる点は、「お～だっ(た)」と一致するが、過去の結果継続での使用が見られる点は、「お～だっ(た)」とは異なっていた。つまり、【表5】中、網掛けを付したように、「お～だ」「お～だっ(た)」と「お～です」と「お～でし(た)」との関係が異なっているといえるだろう。

5.2 過去の結果継続での使用から考える「お～だ」から「お～です」への変遷

【表5】中、網掛けを付した箇所に注目して変化をまとめると、【図1】のようになる。

【図1】「お～だ」から「お～です」への変化



【図1】で示したように、「お～だ」から「お～です」への交代には、待遇面での違い（小松（2006））の他に、時間的側面における違い、つまり、テイタ形に言い換えられる過去の動作継続や過去の結果継続を表すことができなくなるという変化も起きたと考えることができる。また、新しく一般化した連用形「お～だっ(た)」は、「お～だ」の新しい活用形として用いられるようになるが、「お～でした」と交代する際には、「お～だっ(た)」では表しにくかった過去の結果継続を「お～でした」は表すようになるという変化が起きていると考えられる。現代日本語における「お～でし(た)」は過去の結果継続を表すため（丹羽（2008））、明治期東京語における「お～でし(た)」は現代日本語の使用へと近づいているといえる。そして、このような「お～だ」と「お～です」の表す時間的側面の違いは、明治期における両表現形式の担い手や使われる場面が異なっていたということが影響したのではないかと考えられる。

6. 今後の課題

本稿では、明治期東京語における「お～だ」、「お～です」の表す時間的側面に注目して、「お～だ」から「お～です」に交替する時期におけるその違いを明らかにすることを目的として調査、考察を行なった。「お～だ」の近世後期江戸語からの待遇表現形式における「お～だ」の特徴と変化等を含めた通時的変化について、大きな視点からまとめる必要があると思われるが、今後の課題としたい。

◎参考文献

- 菊地康人 (1994, 1997) 『敬語』 講談社
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現在日本語の時間の表現—』 ひつじ書房
- 窪田富男 (1993) 「敬語動詞の状態性と動作性—「お～だ」形式との関連をめぐって—」 『松田徳一郎教授還暦記念論文集』 研究社
- 小松寿雄 (2005) 「江戸東京語の敬語形式オ～ダ」 『国語語彙史の研究』 24、和泉書院
- 小松寿雄 (2006) 「オ～ダからオ～デスへ」 『高見澤孟先生古希記念論文集』
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2002) 『日本国語大辞典』 第二版、小学館
- 日本語文法学会編 (2014) 『日本語文法事典』 大修館書店
- 新屋映子 (2010) 「主体尊敬述語形式「お～だ」をめぐって」 『日中言語研究と日本語教育』 3
- 丹羽哲也 (2008) 「動詞の敬語形「お／ご～だ」のテンス・アスペクト」 『文学史研究』 48
- 辻村敏樹 (1968) 『敬語の史的研究』 東京堂出版
- 山田敏弘 (1990) 「「おVだ」「おVである」に関する一考察」 『名古屋大学人文科学研究』 19
- 山田里奈 (2013a) 「江戸後期から明治20年代までにおける尊敬表現形式「お（ご）～だ」の使用」 早稲田大学国語教育学会 (第257回) (第7回学生会員研究発表会) 発表資料
- 山田里奈 (2013b) 「明治20年代までにおける〈する・なる〉の尊敬表現形式 - 「お～なさる」、「～なさる」、「お～だ」系を中心に -」 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』 21-1
- 山田里奈 (2022) 「近世後期江戸語から明治期東京語における「動詞連用形+ます」の使用」 『実践国文学』 102
- 山田里奈 (2023) 「近世後期江戸語における「お（ご）～だ」形式の使用 —現代日本

語における「お（ご）～です」との違いに着目して―」第402回日本近代語研究会（2023年度春季発表大会）発表資料

山田里奈（2024）「近世後期江戸語における尊敬表現形式「お～だ」の使用―〈ている〉の使用に着目して―」実践女子大学大学院院生発表会（2024年8月1日 於実践女子大学）

湯沢幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』明治書院〔増補版、1957〕

◎調査対象資料 ＊本文中、出典を示す場合には下線部を省略形とする。

『萬国航海西洋道中膝栗毛』（假名垣魯文、1870〈明3〉）（『明治文學全集』）、『牛店雑談安愚楽鍋』（假名垣魯文、1871〈明4〉）（『明治文學全集』）、『春雨文庫』（松村春輔、1876〈明9〉）（『明治文學全集』）、『金之助の説話』（無署名（「東京繪入新聞」）、1878〈明11〉）（『明治文學全集』）、『巷説兎手柏』（高島藍泉、1879〈明12〉）（『明治文學全集』）、『浅尾よし江の履歴』（無署名（「東京繪入新聞」）、1882〈明15〉）（『明治文學全集』）、『一読三歎当世書生氣質』（坪内逍遙、1885〈明18〉）（『明治文學全集』）、『新磨妹と背かゞみ』（坪内逍遙、1886〈明19〉）（『明治文學全集』）、『雪中梅』（末広鉄腸、1886〈明19〉）（『新日本古典文学大系明治編』）、『浮雲』（二葉亭四迷、1887〈明20〉）（『明治文學全集』）、『ふくさつゞみ』（山田美妙、1887〈明20〉）（『山田美妙集』2012）、『花間鶯』（末広鉄腸、1887-1888〈明20-21〉）、『処世写真緑蓑談』（前編／続編）（須藤南翠、1888〈明21〉）（『明治文學全集』）、『乙女心』（石橋思案、1889〈明22〉）（『明治文學全集』）、『この子』（山田美妙、1889〈明22〉）（『山田美妙集』2012）、『細君』（坪内逍遙、1889〈明22〉）（『明治文學全集』）、『二人女房』（尾崎紅葉、1891〈明24〉）（『明治文學全集』）、『黒蜥蜴』（広津柳浪、1895〈明28〉）（『新日本古典文学大系明治編』）、『浅瀬の波』（広津柳浪、1895〈明28〉）（『新日本古典文学大系明治編』）、『五大堂』（田沢稲舟、1896〈明29〉）（『新日本古典文学大系明治編』）、『多情多恨』（尾崎紅葉、1896〈明29〉）（『紅葉全集』）

＊本稿はJSPS科研費による若手研究「近世後期江戸語から明治期東京語における丁寧語の体系変化に関する研究」（課題番号：22K13130）の成果の一部です。

（やまだ りな・実践女子大学専任講師）